

東日本大震災から3年、東北の復興の経験を世界へ

01



南三陸町でシーズンを迎えたカキの殻をむく作業場を見学する研修員



東松島市で復興のノウハウを学んだインドネシアの研修員 (撮影：渋谷敦志)

3月11日、東日本大震災から3年がたちました。未曾有の被害を受けた東北地方の復興を後押しし、開発途上国の防災能力の強化にもつなげるため、JICAは2つの柱を設けて取り組みを進めてきました。

1つ目の柱は、東北と途上国をつなぐこと。2004年のスマトラ沖大地震・インド洋津波や2010年のチリ地震などで被災した国々と東北の橋渡しをし、互いの教訓や復興の経験などを共有するのが目的です。

その一環として2月には、アジア、中南米の9カ国から22人がJICA東北の研修に参加しました。研修員たちは、三陸海岸から福島県南相馬市まで、津波の被害を受けた建物や防潮堤などを視察し、被災地の住民や自治体の職員と防災時の避難や復興の様子について意見交換しました。宮城県南三陸町では、「みんなで力を合わせ、漁業の復興を目指しています」と力強く話す地元の人々の姿に感銘を受けていました。帰国後は日

本での学びを生かして、災害に強い国づくりに取り組んでいます。

2つ目の柱は、宮城県東松島市との連携です。同市の津波による浸水域は65%に達し、犠牲者は1000人を超えました。その復興に向け、スマトラ沖大地震・インド洋津波の被災地であるインドネシアのバンドアチエ市から2人の職員が来日し、2013年3月から11カ月間、復興の経験を学び合う研修が行われました。両市はこの4月から、JICA草の根技術協力事業を通じて、災害後の復興の新しいモデルづくりに取り組む予定です。

また、東松島市は1月、昨年11月に発生した台風で甚大な被害を受けたフィリピンでセミナーを開催。100人以上が東松島市の復興の経験に聞き入っていました。JICAは引き続き、東北の被災地に寄り添い支援するとともに、世界各地の災害による被害を減らすための事業を実施していきます。

途上国の人づくりで東京オリンピックを盛り上げる

02



「東京オリンピックに途上国のコーチとして出場してみたい」と為末さん(右)

開発途上国で体育や柔道、水泳、野球などを指導するスポーツ分野のJICAボランティア。これまでに3000人以上が派遣され、現在も100人以上が世界各地で活動中です。JICAは2020年の東京オリンピック開催に向け、その派遣規模を倍増する計画です。

これを受けて2月25日、一般社団法人アスリートソサエティが東京都内で国内のアスリート向けに、途上国のスポーツ事情について学ぶ勉強会を開催しました。会場に登場したのは、陸上競技で3回のオリンピック出場経験を持つ為末大さん。マレーシアで青年海外協力隊として障害者を対象に水泳を指導した峰村史世さんは「パラリンピックを目指す選手の指導にやりがいを感じました」とコメント。「スポーツと教育が強く結びついている日本人だからこそ、途上国の人づくりに貢献できるはず」と為末さんはエールを送りました。

中高生がエッセイで国際協力に挑戦

03



表彰状を受け取る青木さん。「どんなに小さくても、一步を踏み出した」と頼もしく話してくれた

2月22日、東京都内で「JICA国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト2013」の表彰式が行われました。

このコンテストは、日本の中学生に国際協力への理解を深め、自分ができることを考えてもらおうとJICAが毎年実施しているもの。今年で18回目を迎えた中学生の部には4万4289点、52回目を迎えた高校生の部には2万8964点の作品が寄せられました。

中学生の部でJICA理事長賞を受賞した青木至人(あきまひと)さんは、タリバンに銃撃された少女マララ・ユスフザイさんに衝撃を受け、開発途上国に本を贈った体験談をまとめました。高校生の部でJICA理事長賞を受賞した根本明佳(もとあきよし)さんは、フィリピンでのボランティア体験について書きました。

上位入賞者には、日本が実施する国際協力の現場を訪ねる海外研修が贈られます。